

以下のテキストは、2025年11月1日・2日に開催された「Knots Art Festival at サンタナ学園」の展示スペースで発表したものです。

## 開催のご挨拶

Knots for the Arts（金仁淑、西田祥子、杉田モモ）

## サンタナ学園アートプロジェクトをたどる4つの文脈

山田創（滋賀県立美術館）

- 1 サンタナ学園について
- 2 日本とブラジル——移民の歴史と現在
- 3 金仁淑とサンタナ学園
- 4 サンタナ学園のみんなとの出会いから4年目、そしてこれから

## 扉の向こう

山田チアニ（Knots Art Festival 日葡二言語コミュニケーター）

## 開催のごあいさつ

本日は「Knots Art Festival at サンタナ学園 〜観て、描いて、奏でて、食べて、ときどき踊って！ みんなを結ぶアートのお祭り〜」にお越しくださり、誠にありがとうございます。このフェスティバルは、みなさんがプログラムを通して共に体験し、創り上げる参加型のフェスティバルです。

主催する Knots for the Arts は、「社会と関係性を結ぶアート活動」を目的に、アーティストの金仁淑、キュレーターの西田祥子、ギャラリストの杉田モモによって結成された現代アートのコレクティブで、2022 年から活動を続けております。

日本語で「結び目」を意味する Knots（ノッツ）という名前には、アートを通して人と人をつなぐという思いが込められています。これまで、さまざまな分野のゲストを招きながら、多彩なプロジェクトを展開してきました。

本年は、サンタナ学園のみなさんをはじめ、ゲストキュレーター、合同会社アトリエカフエ、日葡（二言語）コミュニケーターの山田ちあにさん、フェスティバルに賛同してくださった日韓のアーティストの皆さま、サンタナ学園に通う子どもたちのお父さまでありアコーディオン奏者のアドリアーノ・ミヤケさん、そして多くのボランティアスタッフの方々と共にプロジェクトチームを構成し、長い時間をかけてコミュニケーションを重ねながら、子どもたちとのワークショップやフェスティバルの準備を進めてまいりました。

サンタナ学園との協働は 2022 年より続いており、これまでのプロジェクトに関わってくださったメンバーも、今回スタッフとして参加しています。

このように多くの協力者、後援・協賛団体、そして支援者の方々との貴重な出会いと協働に恵まれ、本日この日を迎えることができました。

ご来場の皆さま、そしてこれまでご協力くださったすべての方々に、Knots for the Arts 一同、心より感謝申し上げます。

誰かと共に創造する体験は、互いを「他人」ではなく「あなたと私」として結びつけ、関係を築くきっかけになると私たちは信じています。

今日一日が、みなさまにとって新たな出会いと発見に満ちた時間となることを、心から願っております。

Knots for the Arts（金仁淑・西田祥子・杉田モモ）

## サンタナ学園アートプロジェクトをたどる4つの文脈

山田創（滋賀県立美術館）

### 1 サンタナ学園について

サンタナ学園は、1998年に中田ケンコ（以下、ケンコ先生）が滋賀県愛荘町に創設したブラジル人学校です。プレハブと一般住宅を組み合わせた校舎は、いわゆる「学園」らしくは見えないかもしれません。隣家にはブラジル人が暮らし、校庭代わりの道路ではポルトガル語とバレーボールが頭上を飛び交います。路地を一本隔てただけで異国の光景が広がっていることに、驚く人も多いことでしょう。

ブラジルで17年間教師を務めたケンコ先生が初めて日本を訪れたのは1992年。長期休暇を取得し、ゴルフ場でキャディーとして働きながら過ごすなかで、約200人のブラジル人労働者が働く滋賀県のある企業を訪れる機会を得ました。

そこでケンコ先生は、ブラジル人労働者の子どもたちの境遇に衝撃を受けます。親が働いている間、子どもたちは学校に行く術もなく、テレビを見て過ごしていたのです。一度ブラジルへ帰国したケンコ先生ですが、再来日して5年間働いて資金を貯め、1998年5月にサンタナ学園を開校にこぎつけました。なにが彼女をそこまで突き動かしたのでしょうか——その信念と行動力の背後に、迫力に満ちた使命感を感じさせます。

以降、この学園は、日本で働く両親らすブラジルにルーツがある子どもたちを受け入れ、ポルトガル語での学習を提供してきました。現在、幼稚園から高校生まで現在約50名の子どもたちが通っています。子どもたちの多くは日本語を話すことができません。勉強だけではなく、ビザに関する問題や生活の困りごとの解消など様々な相談に応じているため、学園であるとともに、一つのコミュニティとしても機能しているといえます。

一方で、学園の運営は容易ではないようです。サンタナ学園は公的な学校としての条件を満たせず、厳密には「私塾」扱いのため、公的補助を十分に受けられないことが大きな原因の一つです。保護者の授業料と支援者からの寄付に支えられながら、施設の老朽化や教員確保といった課題に直面しています。

こうした困難のなか、ケンコ先生をはじめとする多くの人々の尽力によって、学園は20年以上にわたり運営されてきました。そして今日も、日本とブラジル、2つの国の狭間に立つ子どもたちに、安心して暮らせる毎日を、友人らとともに過ごす青春を、生きていくための学びを、届けています。

### 2 日本とブラジル—移民の歴史と現在

1908年、異国の地へと夢を求めて海を渡ることを決意した781人の日本人を乗せた「笠戸丸」がブラジルのサンパウロに到着しました。背景には、大規模農業の労働力不足を補いたいブラジルと、人口調整を図りたい日本の利害の一致がありました。その後100年で、約26万人の日本人が移民としてブラジルへ渡りました。今日、ブラジルには多くの日系人が

暮らしています。

一方で、高度経済成長とバブル経済を経て、今度は人手不足に直面した日本。1990 年に改正された「出入国管理及び難民認定法」は、日系外国人(3 世まで)とその配偶者に日本での就労資格を与えました。これを機に「ニューカマー」と呼ばれるブラジルからの移民が増加し、2 つの国における移民の送り出しと受け入れの関係は完全に逆転しました。

多くのブラジル人は主に国内の自動車関連工場の付近の団地などに暮らすようになり、定住化が進みました。滋賀県もこうした地域の一つです。ピークの 2007 年頃には国内約 30 万人、県内約 1 万 4,000 人が暮らしていましたが、リーマンショックや COVID-19 のパンデミックを経て減少傾向にあり、現在は国内約 20 万人、県内約 9,000 人ほどです。サンタナ学園の在籍者数もこの傾向を反映し、ピーク時の 100 名超から現在の約 50 名へと減少しています。

視点を变えて、外国人の子どもたちの就学状況を見てみましょう。文部科学省の調査によれば、2024 年時点で義務教育年齢の外国籍の子ども約 9 万 7,000 人のうち、約 8,500 人が不就学、またはその可能性があります。約 1 割弱の子どもたちが教育とつながっていない可能性が高いという、衝撃的な状況です。

2007 年以降、ブラジル人が滋賀県で最も多い外国人でしたが、2024 年以降はベトナム人が一位となっています。彼らの多くは技能実習生として日本で働いており、その背景にはやはり、この国の深刻な人手不足があります。

### 3 金仁淑とサンタナ学園

なぜ滋賀県にゆかりのなかった金仁淑がサンタナ学園と関わることになったのでしょうか。きっかけは、筆者が当時在籍していた近江八幡市のボーダレス・アートミュージアム NO-MA(以下、NO-MA)で企画したグループ展「79 億の他人」(2021 年)に、彼女が出展したことでした。仁淑の仕事に感銘を受けた筆者は、展覧会終了後、NO-MA の運営母体である社会福祉法人グロー(以下、グロー)が事務局を務めるプロジェクトの一環として、彼女にサンタナ学園との交流事業のコーディネートを依頼。仁淑はこれを快諾し、アートプロジェクトが始動しました。

初めて仁淑と学園を訪れたのは 2022 年 5 月のことです。その 2 ヶ月後、初めての交流プログラムとして、NO-MA での写真撮影会を実施しました。内容としては、展示空間で自撮りを含む写真を撮るというもので、子どもたちが日頃親しんでいる TikTok などの SNS がヒントとなりました。次に企画したのは近江八幡の町歩きです。旧市街を練り歩きながら、日本とアメリカ 2 つの国の様式を取り込んだ「ヴォーリズ建築」を探すアクティビティも盛り込みました。

そのような中、東京都写真美術館で開催される恵比寿映像祭のコミッションプロジェクトに、仁淑が選出されます。同プロジェクトは、国内 4 人の映像作家が選出され、それぞれ作品を制作してコンペティションを行うというものでした。仁淑はそれまでに増して頻繁

にサンタナ学園を訪れては、子どもたち一人ひとりのビデオポートレートに収め、ビデオインスタレーション作品《Eye to Eye》を制作し、特別賞を受賞しました。恵比寿の東京都写真美術館での展示の際、サンタナ学園の先生たちや筆者を含む関係者で子どもたちを引率し、滋賀県から夜行バスで東京へ向かったのは忘れられない思い出です。

2023 年度には、滋賀県内のさまざまなスポットを訪れ、地域の人々にインタビューする企画が、グローを中心とした団体により実施されました（このとき、私はすでに現在の所属先に転職しています）。この企画は、アートブック『扉の向こう』として結実しています（ぜひお手元の本を読んでみてください）。2024 年度には、《Eye to Eye》が東京都現代美術館で展示され大きな注目を集めるとともに、第 48 回木村伊兵衛写真賞、さらに令和 6 年度(第 75 回)芸術選奨新人賞を受賞するなど、サンタナ学園をめぐる彼女の仕事は高い評価を受けることとなりました。

#### 4 サンタナ学園のみんなとの出会いから 4 年目、そしてこれから

金仁淑とサンタナ学園との交流も 4 年目となりました。サンタナ学園のメンバーも卒業や帰国などで大きく入れ替わり、全体の人数は減少傾向にあるなど、学園の姿は変化しています。仁淑はこの間、何度もサンタナ学園に通い、子どもたちと会い続けてきました。一度は、帰国した子どもたちに会うため、ブラジルにまで足を運んでいます。

サンタナ学園との交流活動に参加する仲間も増えました。本フェスティバルの主催である Knots for the Arts のメンバーたち、デザイナーの中居真里、会場内の什器設計を手がけたアトリエカフエ、地域のボランティアな応援者たち、また忘れてはならない最大の協力者である学園の先生たちや子どもたちの保護者の方々——とにかく、さまざまな人がこの活動に参加し（あるいは巻き込まれ）、特に 3 年目以降は助成金などの後ろ盾もなく予算が潤沢ではない本プロジェクトにおいて、関係者たちはときに仕事の域を超えて職能を発揮し、意見を交わしてきました。そうして、このフェスティバルが成り立ちました。

3 年目までのアートプロジェクトでは、主に仁淑をはじめとする実施者側がサンタナ学園の子どもたちに滋賀県の地元——周囲の世界——を伝え、彼らと周囲の世界をつなぐことが主眼でした。一方で、このフェスティバルで注目していただきたいのは、その関係が逆転していることです。いま、周囲の世界（あなた）が、彼らを訪ねています。いずれ「ここ」と「周囲」の隔たりが簡単に飛び越えられるようになる世界に向けて、このフェスティバルは踊り、歌い、またこの場所に集う人々を見つめ合い (Eye to Eye) へと誘うことでしょう。

## 扉の向こう

山田ちあに（日葡二言語コミュニケーター）

私はブラジルで生まれ、三歳のときに工場で働くことになった親と共に日本に渡った。その後、小学二年生でブラジルに戻り、小学五年生でまた日本に帰国。行ったり来たりの子ども時代だった。大人になった今だからこそ言えるけれど、その経験は楽ではなかった。

勉強はいつも言語の壁に苦しめられた。周りが当たり前のように理解できる言葉が、自分にはすぐに分からない。授業に置いていかれるたびに「なんで私だけ……」と悔しくてたまらなかった。文化や人との接し方も違い、ブラジルにいれば日本人として見られ、日本にいればブラジル人として見られる。どこにいても「外国人」として区別され、完全に溶け込むことができなかった。引っ越しが多く、やっと慣れたところにまた新しい環境に移る。そんな繰り返しのなかで「人と違うのは嫌だ」と強く思い、時には自分のいる環境や両親を責めたことさえあった。

それでも——そんな私だからこそ得られたものもある。国をまたいで育ったからこそ、広い視点と柔軟な価値観を身につけることができた。人と比べて迷ったからこそ、自分のアイデンティティを強く意識するようになった。二つの言語を学んだことで今の仕事につながり、自分の力として胸を張れるようになった。幼少期の苦しい経験は、確かに今の私を支えている。

そして何より大切なのは、人との出会いだ。同じ境遇を経験している子や、理解してくれる大人たちと出会えたことで、「一人じゃない」と思えるようになった。あの安心感はいまも心に残っているし、だからこそ今は、私自身が同じ境遇の子どもたちを助けたいと思っている。あの頃の自分に手を差し伸べたかった気持ちが、次の世代を支える原動力になっている。

コミュニケーターとして子どもたちに関わる中で見つけたのは、「違い」は壁ではなく、扉になりうるということだった。その扉を開ける勇気を持ったとき、世界はもっと大きく広がる。だから、外国にルーツを持ち日本で暮らす子どもたちに伝えたい。

私はあなたのつらさを知っている。今は、目の前の環境や人間関係が世界のすべてのように思えるかもしれない。でも世界はもっと広く、もっと優しい。

どんな花も、それぞれ違う色や形で咲いている。どんな石も、角があるものもあれば丸いものもあって、それぞれの美しさがある。どんな音も、だれかにとっては世界で一番心地よい響きになる。あなたも同じ。みんなと同じでなくてもいい。あなたが持って生まれたものの輝きに、いつか必ず気づく日が来る。そのときまで、どうか自分を大切に育ててほしい。

私が人と違う自分を誇りに思えるようになったように、あなたもきっと胸を張って言えるはずだ。それが、あなたの強さになるのだから。